

## 対抗的語りとしての証言文学 —アレクシエーヴィチ『戦争は女の顔をしていない』と家父長制—

石丸 敦子

### Testimonial Literature as The Counter Narrative —The Patriarchy Revealed by Alexievich "War's Unwomanly Face"—

ISHIMARU Atsuko

#### Abstract

Svetlana Alexievich's first work "War's Unwomanly Face" is the literature which puts together testimonies from women who serving in the so called Great Patriotic War not only just as combat medics, but also as female soldiers.

In the middle of war, surviving through the battles became the only aim for everyone regardless of gender. Women seemed to be liberated in such a situation. However, the remarkable contribution of female soldiers and the misery of the battlefield that they experienced were erased from the history which men described. The ruling historiography has erased the facts that women had contributed in all areas of the war. The master narrative regarded only men as the subjects of history.

In this paper, we look also into the structure of female oppression, that is, patriarchy underlying in the society, then reconsider this by examining the marginalization of women after the war. The testimony of female soldiers reminds us of the existence of a patriarchy.

However, experiencing the battlefield as an independent individual called volunteers led women to deny the war. We will get to know that going to the battlefield already means that we tolerate the war and nation state invading our thoughts.

"War's Unwomanly Face" reminds us that the patriarchy which is indispensable for the continuance of modern capitalism is tightly integrated into the society. What Alexievich did in this literature is to re-examine this modernity critically and try to overcome it.

When the narrative of history takes back its original form, that is, weaving human history, the marginalized minority will be transformed into a historical individual by testifying.



## 目次

### はじめに

- I. 文学であること
  - II. 性差と能力についての言説
  - III. 「女らしさ」を保持しようとするものの意味
  - IV. 戦争とナショナリズム
  - V. 女たちの戦後
  - VI. 戦争の機制にないもの
  - VII. 本書に書かれていないこと
- おわりに

## はじめに

証言文学を編むと言うことは、記憶を通した過去の掘り返しの行為である。あるいは、抑圧され、周縁化され、記録から遠ざけられたマイノリティの、書かれることのなかった歴史の再編成の事業とみなすこともできる。

スヴェトラナ・アレクシエーヴィチの5つの作品もすべて、戦争や原発事故、国家の崩壊というソ連の経験した巨大なカストロフに巻き込まれ、押し流されていった「小さい人々」<sup>1</sup>の声を集めたものである。作品の全体が人間の苦悩のみで構成されていると言っても過言ではない。テーマを絞って集められた証言が、どれ一つとして同じものはない<sup>2</sup>。複雑なものを複雑なままに、解釈も教訓も啓蒙もなく、問いとして開かれているのである。ただ作者と読者の捉え返しの作業を誘う。そのためにその相貌は多面的であり、100人の読み手の方はそれぞれの100の像を結ぶことになる。苦悩とは裏腹の得も言われぬ豊かさのなか、どこに分け入っても人間の感情の多様な輝きが放散されてくる。アレクシエーヴィチは次のように言う。

苦悩というのは、秘められた真実に最も直接関係を持つ高度の情報だと思う、それは生きているということの神秘に直接かかわっている、ロシア文学のすべてがこのことを扱っている<sup>3</sup>。

「生きているということの神秘」とは人間存在の悲劇性でもあろう。

アレクシエーヴィチの作品の中で、この豊かさはある種の祝祭の感覚として立ち昇る。過酷な体験をした証言者に対する不敬の意識や倫理的な善悪はもはや超えられたところで、読み手の皮膚の上におりてくる否定しようもない感覚である。核をあつかい、どの様な救済も望めないように見える『チェルノブイリの祈り』[アレクシエーヴィチ 1997=1998]にさえ、それは滑り込んでくる。

本稿が取り上げる『戦争は女の顔をしていない』[アレクシエーヴィチ 1984=2016]にも宿る底知れない豊かさの源をたどろうとすると、戦争にかならず付随する悲劇性や、女性が周縁化されるシステムの持つ悲劇性がまず直感体感される。さらにテキストを底まで下りていくと、不安という人間存在の根幹にかかわるようなもの、あるいは存在を存在者からひきはがすことのできない存在論のようなものに突き当たる。それは、自然や物質よりも精神や意識を根源的な原理と捉える観念論的な形而上学を超えいでたところでの、身体感覚でとらえられる経験としか言いようのないものである。死を無と同一視することが不可能になるような、異なる次元、世界の外部へとといざなわれる。

アレクシエーヴィチが、繰り返し自分は「感情の歴史」を紡いだと言っているが、彼女の作品群は国家や国民の話ではなく、まさに顧みられることのなかった一人一人に降りかかったこと、そして自分の出来事をそれぞれがどう捉えているのかという語りが骨格にある歴史叙述としても存在している。機械化された世界の中、国家の利益が最優先される中で、個々の人間はアトムと化すしかない。そのような歴史の表舞台にいる支配者や権力者によって描き出された大きな物語、マスター・ナラティヴに対し、アレクシエーヴィチは血の通った人間を物語の中心に置く対抗的語り、カウンター・ナラティヴを証言を用いて紡ぎあげた。

ノーベル文学賞が授与されたとはいえ、アレクシエーヴィチ研究は緒についたばかりといってもいい状況である。この文学の特異な構造にまずは焦点を当て

て解明しようとするものがその大方を占める。『戦争は女の顔をしていない』は、タイトルが示唆するように明らかにテーマの一つとしてジェンダーの問題を内包しているが、アレクシエーヴィチ作品をテキストとして正面からジェンダー論を展開する研究は今のところ見当たらない。そのなかで、2017年に開催された加納美紀代氏による本作の読書会では、戦争の物語に「書かれていないこと」として性犯罪を取り上げる視点が提示されたが、本稿第Ⅶ章はそのことに大いに触発されている。

アレクシエーヴィチ文学を研究するにあたって、最終的には作品の持つ豊饒さの源を解き明かし、理論化することを遠望している。本稿ではそこに至る道筋として、テキストから直接取り出すことのできる情報を分析すると共に、アレクシエーヴィチの感情や思想に迫ってみたいと考えている。具体的には、女性兵士の語りが浮き上がらせる戦時のジェンダー編成の様相を整理するなかで、大祖国戦争後の元女性兵士の周縁化状況に着目し、社会の基盤にある女性抑圧の構造にまで下りていってその様相を明らかにする。

「女たちが語ってくれたことにはとてつもない秘密が牙をむいていた。」<sup>4</sup>という一文にこだわり、女性たちを圧迫してきた古くからあるシステムとしての家父長制について再考することにしよう。

## I. 文学であること

『戦争は女の顔をしていない』は、アレクシエーヴィチの第一作目にあたる。ソ連では百万人を超える女性が大祖国戦争に従軍し、またパルチザン部隊や非合法の抵抗運動に参加した女性たちもそれに劣らぬ働きをした。そのうちの500人を超える女性兵士だった人びとに個別に聞き取り調査をし、テープから起こした記録から200強の証言を抽出しておさめたものであるが、従来の歴史書と異なるのは、彼女らに戦場の英雄としてではなく生身の人間として光をあてたところである。ソ連の従軍女性兵士たちは15歳から30歳で出征した人たちで<sup>5</sup>、その当時の他国の場合のように看

護師や軍医というだけでなく、斥候、工兵であり、狙撃兵といった殺戮の要員であった人も少なくない。多くの女性の戦闘員が本格的な戦力として活躍したのは、この独ソ戦がはじめてと言われている<sup>6</sup>。

しかし、女性兵士の目覚ましい働きと女性たちが体験した戦場の悲惨さについては、「男の言葉」で語られた、男性によってのみ記された戦争の歴史からは消去されている。示し合わせたかのようにみな口を閉ざしたのである。

アレクシエーヴィチは、三十余年もの時を経て、隠されていたものを掘り起こすことに決めた。大きな歴史の後ろに打ち捨てられてきた瓦礫の山のなかから、女性たちの生の声を掘り起こし、ソ連社会の女性抑圧の構図を浮かび上がらせた。アレクシエーヴィチの射程は女性たちの戦後にまで及んでいる。男性にしか開かれていなかった戦争のあらゆる分野に貢献し、もてはやされて紙面をかざり、いくつもの勲章を受けた女性たちが、戦後、戦争に行ったという、まさにそのことのために差別され、孤立させられ、貶められたからである。アレクシエーヴィチは執筆動機の一つを、次のように書き留めている。

女たちはかつて、男ばかりの世界で自分の地位を主張し、それを獲得したのに、なぜ自分の物語を守り切らなかったのだろうか？自分たちの言葉や気持ちを、自分を信じなかったのだろうか？まるまる一つの世界が知られないままに隠されてきた。女たちの戦争は知られないままになっていた……

その戦争の物語を書きたい。女たちのその物語りを<sup>7</sup>。

アレクシエーヴィチは書きいだすことで、女たちの物語を守ろうとしているのである。

「隠されてきたまるまる一つの世界」が描き出された時、同時に女性抑圧の構図、すなわち家父長制と措定することができる構図が浮かび上がってきた。女たちの物語自体に家父長制の籐がはまっているといって

もいい。それは古くから社会の中に深く埋め込まれていて、通常は不可視化され忘却されているため抽出して批判的に捉え返すことは容易ではないが、戦争という非日常がその現れの稀有な契機となった。

本稿が、文学を取り上げながら家父長制という社会的な問題を提起できるとすれば、それは、生身の人間の証言からなり、歴史の資料ともなりうるような証言集の体であるという本作の一つの側面に負っていることは否定できない。しかし、ただ単に証言を集めた証言集では、家父長制の構図の立体的な現れを促すことはできず、文学という磁場であることが要請されていると思われる。

今日でも、本作を含むアレクシエーヴィチの作品はフィクションではないから文学とは言えないとする立場の人は少なくない。しかし、作家が完全に創作した作品のみが文学であるという考え方は解体されつつある。世界は言葉によって構築されたものである、ゆえにすべての記述は物語であると議論する言語論的転回以降、歴史には真実という固い核はなく、歴史ですら物語であるとまで言われるようになった。そのような議論の中では、アレクシエーヴィチの作品が文学かどうかを論じるのはもはや意味のないことだとも言えるが、彼女の作品が持つ文学ならではの力の存在もまた否定しがたく、ここでは文学のテキストであるということを前提としたいと思う。

まず、本作のように、権威ではなく名もない人々の声や感情を、時空を超えて呼び集める場となりうるのは、文学だけに開かれたことであろう。その上で、証言文学が記録や資料としての証言集と一線を画するのは、編集者としての著者の徹底的な介入がなされる、つまり証言を素材とした創作活動がおこなわれている点にある<sup>8</sup>。あらゆるディシプリンのなかで、とりわけ文学が人間の物語として再構築された世界を現象させる可能性を持つ。埋もれていた感情や思想や時代が掬い上げられ、魂のネットワークとして、一つの体系としてその物語が紡ぎあげられる。たとえば、そこでは個々の人間や小さな出来事が詳述され、その細部から輝きが放たれる一方、全体が総合されて大河のうね

りのようなものとして描き出される。物語となって初めて、人は語られたことを自分のこととして受けとめることができるのである。

そもそも文学は他の人文知と融合し格闘する中で、「異質な他者や価値観と出合い、世界を根源から問い返していく力」<sup>9</sup>としてあった。20世紀の世界大戦は、近代の二本の柱である科学技術の発展と資本制経済の新たな展開の里程標となったが、文学もそれと時を同じくして新たな使命を帯びることになった。アウシュヴィッツ、原爆、環境破壊、チェルノブイリ、そしてフクシマと、科学技術は人間の思惑を超え、すでに制御不能に陥り始めている。その根底には生産性と蓄積を追求し称揚する資本の支配があるが、この状況は不可逆的で覆すことができるとは思えず、対抗措置は容易には見いだせない。絶望的にも見える中にあって、少なくとも文学を含む人文知は「暗闇を見通す力を獲得する」<sup>10</sup>可能性は持っている。アレクシエーヴィチが、「宗教や文学には世界を変える力がないことは証明済みである」<sup>11</sup>と突き放したように言いながらも、あきらめることなく文学と共にあり続けるのは、このためだとも思われるのである。

アレクシエーヴィチ作品が文学と歴史という境界を無化した中で、証言者が言葉にできず、作者があえて語ろうとしなかった部分を覆う結界のようなものに内側から圧力をかけて飛び出させてしまう、そのエネルギーの充溢した新たな言説空間もまた、文学の豊かさとしてある。そのとき読み手は、確かに何かが起こった、ここに何かがあった、という驚きに満ちた確信を得るのである。

物語論が文学研究の中に持ち込まれた時、テキストは作者に属するのではなく、作者と読者の双方の関与が重要視されるようになった。[上野他編 2018]そこで、作者との対話が読書の大方を占めるという状況が発生する。表立ったテーマとして掲げられていたわけではないのに、家父長制の存在が女たちの物語の前景に浮かび上がってきたのは、そのような作者と読者のせめぎあいの中においてである。

次章から、テキストの表層から順次深部へ、家父長



制の現れ出る場まで降りていくことにする。

## Ⅱ. 性差と能力についての言説

本書は男性のみの領域とされていた戦場で互角に活躍した女性兵士たちの物語であるとしても、作者はそこに性差に関する社会的な視点までは込めていなかったであろう。しかし図らずも本書は、身体能力、判断力や決断力、胆力、忍耐力といった戦闘時に要請される能力について、ある意味実証的に女性が男性に劣るという昔ながらの通念を覆してしまっている。

社会学者のR・コンネルは、著書『ジェンダー学の前線』[コンネル2002 = 2008]で、多くの事例を検証して、男女間には差異より類似点の方が圧倒的に多いということができると結論づけている。男女が優劣の関係にあるという観念はすでに掘り崩されつつあるが、ここで目の当たりにする戦争体験はもっと圧倒的で具体的な説得力を持っている。

衛生指導員のマリヤ・ペトロヴナ・スミルノワは次のように回想する。

ドイツ軍が退却し…両軍が退いた後に負傷した砲兵中尉コースチャが倒れていた。彼を救い出そうとした衛生兵達は殺されてしまった。衛生部隊のシェパードが二匹（そういうのを見たのはその時が初めて）這って行ったけれど、犬達もころされてしまった。そこで私は帽子をぬいで全身を伸ばして立ちあがって、戦前人気のあった『貴方が手柄を立てるよう祈って見送った』という歌をはじめは小さい声で、それから声を張り上げて歌い始めた。敵も味方も静まり返った。私はコースチャを轎に載せて味方の方へ曳いて歩きながら、「どうか背中だけは撃たないで。撃つなら頭をやって」と祈り続けたわ。今、やられる…今が最後の瞬間なんだわ。今！痛いんだろうか。ああ、お母さん！でも、とうとう一発も銃声は鳴らなかった。

…私は戦火をくぐって481人の負傷者を救い出した。…砲兵大隊に相当するそうよ。背負って運

んだの。自分の三、四倍の体重を。負傷者は余計重たいの。持っている武器も運ばなければならないし。それに軍人外套や軍靴。80キロぐらいを背負って運ぶ。運んできて下してやると、また次を。70キロか80キロの重さを。一回の攻撃で五回か六回。私自身は48キロしかないのに。バレリーナの軽さ。今はもう信じられない……<sup>12</sup>

スミルノワのこの事例は女性の三つの可能性を示している。まず、生物学的に男女間には身体の大きさにおいては明らかに差異があるが、負傷兵の体と装備一式という自分の数倍の重量のものを運ぶというその時点で要請されていた肉体労働を完全にこなす身体能力があるということである。次に、通念として、女性はイレギュラーな事態に対処できず、うろたえると言われているが、彼女は機転もきき胆力もある。最後に、この戦場には同じ条件下で味方兵は大勢いたはずだが、スミルノワだけが職務を遂行した。ここでは男女間の能力の差異は消滅しているが、スミルノワが男性であれば、なんの検証もなく男性の手柄となっただろう。

次の例もまた、完全に条件は同じ状況下での働きである。

オリガ・ヤコブレナ・オメリチェンコは、火だるまの兵士をすくおうとただ一人塹壕から飛び出した。爆弾が火薬庫に命中して、そばにいた兵士が黒い肉切れとなってその場で跳ねていたが、だれもが呆然としてその場を動けなかったとき、オリガはシーツをひつつかんで駆けつけ、その兵士に覆いかぶさると冷たい地面に押しつけた。すぐにその兵士は静かになってしまったのだが、血まみれになったオリガに古参兵が近寄ってきて、彼女を抱きしめた。そして「戦争が終わって生き残れたとしても、この子はもう人間に戻れないよ、これで終わりだ」とつぶやいた<sup>13</sup>。

オリガはただ人間としてふるまったというだけかも

しれず、1パーセントにも満たないように見える救助の可能性に賭けて体が動いたということは、男女の別を超えた個人の資質かもしれない。そのときの古参兵の見せた情動は、女の子にそんなことができるはずがない、この体験を乗り越えられるはずがないという固定観念から発せられたのであろうが、この場合はむしろ彼の方こそ癒えないトラウマを抱え込んだ可能性さえある。

本書には、衛生指導員ばかりでなく、砲兵、射撃手、工兵、医師、騎兵など多岐にわたる職掌において、女性兵士が男性の兵士と同等かそれ以上に任務をこなしたという事例に事欠かない。一定の方法論にのっとっていないとはいえ（例えば、佐官や将官になった女性は本書には登場しないので、大きな部隊を指揮するマネジメントの能力については論じようがない。また、男性に劣る行為の見られた例があったかどうか不明である。）、それはあたかも男女差はないと立証する貴重なデータを収集しているかのようである。図らずも戦場は、身体的精神的能力の差のみを比較するために、被験者が男女という性差以外のすべての条件が同じである稀有な実験場のように働いた。体力でも頭脳でも男性が女性よりも優れているという言説は、戦争という純化された極限状態の中で妥当性を失っているように見える。

そして、アレクシエーヴィチが汽車の中で同席した男性の士官の話は、やはり女性兵士の比類なき勇敢さを物語るものであるように見える。

ドイツ軍が銃撃をやめない…塹壕の中の誰も予期していなかったが、突然塹壕から女の子たちが飛び出した。負傷者に包帯をしてやり、引きずってくる。ドイツ軍でさえ一瞬呆然としたほど、みな驚いた。夜10時頃には女の子全員が重傷を負っていた<sup>14</sup>。

解釈も解説もよせつけないように見えるこの証言は、ヒューマニティーの発露としてや、ナショナリズムや極限状態での高揚感としてだけでは説明をつけら

れない。いくつもの証言でみられる、不具になれば家庭も持てないという女性の不安がここでは消えてしまっている。

この事例は、もはや男女の別を顧慮する次元にはないように見える。ただ人間のこととしてあり、個々の名前は消え去り、むき出しになった人間が露呈し、存在するという事態だけが出来している。

女たちの物語を書くなかで、アレクシエーヴィチは「人間は戦争の大きさを超えている」として、人間のスケールが戦争を超えてしまうような、そういうなかでは「歴史を超えたもっと強いものが支配している」<sup>15</sup>と書き留めている。

男性と互角に仕事を遂行する女性兵士の物語は、男女の性差に関する古くからの言説を解体し始める。しかしそれだけではなく、アレクシエーヴィチのカウンター・ナラティヴの中では、これまで二級市民として初めから声を奪われ存在を不可視化されてきた女性たちが存在したこと、まごうかたなく歴史主体として大祖国戦争の中で生きていたことが証明された<sup>16</sup>。

だがその上で、女たちの物語は人間の物語でもあったことが示されている。

### Ⅲ. 「女らしさ」を保持しようとするこの意味

取材する以前、アレクシエーヴィチは、戦争に女らしい日常などありえない、そんなことは不可能でほとんど禁じられている、若い女の子といえども、笑いや踊り、夏のワンピースやハイヒール、花束のことを忘れ去って過ごすしかないのだと思い込んでいた。しかし、それは間違っていたと気づく。女性たちが何の話をしているとも必ず「美しさ」のことを思い出す。それは女性としての存在の根絶できない部分なのだという<sup>17</sup>。

外科医のヴェーラ・ヨシフォヴナ・ホレワは、あちこちで煙が上がり、いたるところで轟音がしているヴォロネジから退却する途中、店に飛び込んでハイヒールと香水を買ったのを覚えている。海軍の一等兵

だったオリガ・ワシーリエヴナ・ボドヴィシエンスカヤは、ほんの少しでも休憩がもらえると、刺繍をしたり、ゲートルを肩掛けに作り変えたり、女らしい手仕事をした。少しの間でいいから、本来の姿に戻りたかったのだと振り返る<sup>18</sup>。

別のオリガは、戦闘の真っ最中に傷の手当てをするときも、いつも身なりを整えていた。殺された時にみっともなく倒れているというのが一番嫌だったからだ。機銃掃射を受けたときも、とにかく顔や手を隠したものだ。男性たちに、死のことでなくて女の子独特の全くつまらないことを気にしていると言って笑われたことを覚えている<sup>19</sup>。

アナスタシア・レオニドヴナ・ジェルデツカヤは看護上等兵である。仕事で留守の夫に、恋愛でなくて戦争のことを話すようにしっかりと言いつけられていたのに、結局アレクシエーヴィチに話したのは、一晩かかって包帯のガーゼで花嫁衣裳を縫い上げたことだ。包帯は仲間の女の子と一か月前から少しずつ集めていた。本格的な花嫁衣装に軍用長靴をはいた写真をとても気に入っているという<sup>20</sup>。

二等兵で理容師のワシリーサ・ユジュニナの専門は男性の整髪だが、女子がやってくると指揮官の言い通り男のように刈ることにひどく抵抗感があった。だから、少しでも髪が伸びてくれば、夜、女の子たちの髪を松かさやカーラーの代わりにして、セットしてあげた。せめて前髪だけでも巻いてあげたと回顧する<sup>21</sup>。

女性たちは、これらの外面的な女らしさ、あるいは精神の上での女らしさ、女性としての矜持を、たとえ過酷な戦場ででも差し出すつもりはなかったようである。男性と対等に、時には男性以上の兵力となって任務をこなした残りの、戦闘に関わらない生の局面において、男性の価値規範に同化しなければならない理由は特に見当たらない。志願の動機は祖国防衛であり、ファシズムの打倒である。自発的な志願兵であるということはこの文脈においては非常に重要であり、たとえば軍隊の階級が二等兵であったとしても、自立した主体として戦争に参入したということを意味している。

それに比べて、男性の場合は祖国防衛が第一義的であるとしても、徴兵されたものたちは無意識のうちに、他者に突き動かされて戦場に赴いているという一面がある。女性兵士は始めから男性の兵士と異なる位相に立っていたと言えるかもしれない。短髪と大きすぎる軍コートと軍靴を強要されても、彼女たちの女らしさの発現を封じきる力は前線にはなかったと思われる。

ここでは、女性性の象徴としての香水やハイヒールを用いて働きかける男性の存在は全く想定されていない。しかし、女性らしいとされてきた振る舞いは、選ばれる女であろうとすることに端を発する。家父長制の構造の中では、支配者である男性によって被支配者である女性の生のあり方、レベルが自動的に決定されてきたからである。

アレクシエーヴィチはこの従属の歴史のなかで獲得されてきた女らしさというものを否定するどころか、女性における特異な文化としてそれを保持し続けることに意味を見出してさえいる。アレクシエーヴィチは確かに、女性の排斥、周縁化、男性には及ばないものとして女性を貶めることを告発しているはずである。しかし、従属の心性とはすでに切り離されたところで、女性が手にしてきた女らしさの文化を手放してはならないものだと考えているようである。

女らしさを手放さないということは、男性に思考を全面的に預けたりせず、思考の枠組み自体を守り切ろうとすることである。「自分の「文化」に執着することによってその人間性を維持し、時には、主人（男性）の行使する力に制限を設けることができる」[ラーナー 1986 = 1996] ようにである。女らしさが手放されてならないのは、たとえ男性に従属することから再生産されたものではあっても、それが歴史的に獲得されたものだからでもある。歴史を持たないということは、未来もないということを意味するからである。

女性たちが呼び起す肯定的な記憶がある。一つは、戦争を通して祖国に貢献した時間であり、彼女たちの生に誇りを付け加え、アイデンティティを構成する出来事である。もう一つは、平時とは全く違う、戦場で初めて見るようになった自然の美しさである。それは

極めつけに個人的な体験として、戦争のイメージの中でも特別の場所を占めている。

戦時中、どんなに美しい朝があったか、戦闘が始まる前、これが見納めかもしれないと思った朝。大地がそれは美しいの、空気も…太陽も…

男性の兵士たちも死に直面した状況で、同じ体験をしたことは想像に難くない。しかし、戦後、彼らの戦争として認識されるものは、戦闘の場所や通過地点、師団の名前、そして戦闘行為そのものでしかない。家父長制的価値観からすると自然に対する感動などは恥であり、戦争と同義の男らしさとは無縁のものとして、戦後真っ先に封じ込められた。

それに対して、女性たちは、戦場で砲弾にあたって撃ち落とされる小鳥たちにも人間との分け隔てなく心を痛めたことを重要な体験として述懐している。戦場では種の違いを隔てていた垣根が消失する。

ジナイーダ・ワシーリエヴナは、クシチョフスク村の戦いでファシストの戦車隊を騎兵隊が撃破した、有名なクバン・コサックの義勇軍団に入った。団員には制服とともに馬が支給された。雪崩をうって疾走する馬たちに蹴散らされるファシストの戦車部隊とともに、馬は記憶のなかで重要な位置を占めている。

私たちは馬の脚の間で寝ました。馬は脚をそっと動かしますが、人間をひっかけたりしません。馬は死体だって決して踏みつけたりしません。生きている人で負傷しているなら、決して捨てていきません。馬はとても利口な動物です。騎兵隊にとって親友です。忠実な友達です<sup>22</sup>。

女性の兵士は、戦場で、自然を新たな枠組みで捉え返している。人間は自然のごく一部として含みこまれ、木々も鳥も馬も大気も互に関連し融合して、どの一つも侵してはならない大きな体系として再認識される。同時にそれは、戦争というものをエコロジーに対する無謀な挑戦であると感得させることでもある。そ

して、動物が人間より劣り、女性が男性より劣るという所与の固定観念が意味を失う。序列の構造の中で上位に立つ男性には、その視点は獲得しがたいのではないと思われる。

感覚的にばかり捉え返されるのではない。次の二つの例は、戦争という事象を批判的に捉え返して、戦争のただ中で、自らの考えに従って行動する精神の自由を持ちつけられたのは女性の方だったかもしれないと思わせるものがある。

オリガ・ワシーリエヴナは、仲間の兵士がむごたくに殺されたのを見た後でも捕虜たちを殴れなかったと語る。相手が全く無防備だという理由だけでも、殴るという選択はなかった。こういうことは一人一人が自分で判断したことであって、それが大事なことなのだとしオリガはいう<sup>23</sup>。ソフィア・アダモヴナ・クンツェヴィチは看護科曹長だった。ベルリンまで進軍し、議事堂の壁に「私こと、ソフィヤ・クンツェヴィチは『戦争』を殺しにここまで来た」と落書した。共同墓地を見つけると、だれのための墓地であっても、必ず跪いたのである<sup>24</sup>。このことは、1941年に大祖国戦争が始まって以来、祖国防衛とこれ以上同胞がファシストの犠牲になることを許さないという極めてナショナリスティックな意識から前線に飛び込んだときとは、異なる意識の段階にあったかもしれないことを示唆している。

戦争の敵を非人間化するシステムに男性は素早く適応していく。そもそも、軍隊に入るということは、戦争を始めた権力者に思考を預けることである。志願兵の彼女たちにとっては、敵は単純な祖国を脅かす敵であって、支配者の論理を吹き込まれた男性のように、人間以下の殲滅すべき何物かであったことはない。殴るということが女性の本性ではないからという理由にもよらない。戦闘行為や後方支援で男性と互角に活躍しながらも、男性兵士と異なるのは、自分だけの余地というものを堅く保持していたことであろう。「女らしさ」を手放さなかったということは、死地に飛び込む命令に従うときも自身の主人であり続けたということでもあり、戦場で要求されること以上の働きを見せ



たのは思考を縛る上限が設定されていなかったからだ  
と理解される。

女らしさを大事にした最後の例に、射撃手のローラ・  
アフメートワ二等兵の述懐をあげる。

戦争で一番恐ろしいのは何かって？…戦争で一  
番恐ろしいのは死だって答えると思っているんだ  
ろ？私はあんたがたジャーナリストってものを  
知っているからね、ハハハハ…あたしはそうじゃ  
ないことを言うよ…戦争で一番恐ろしかったの  
は、男物のパンツをはいてることだよ。これがあ  
たしにはいやだった。祖国のために死んでもいい  
覚悟で戦地において、はいてるのは男物のパンツな  
んだよ。その頃の男物のパンツって長いのだった  
んだ。がばがばで、つるつるした生地でぬって  
あって。私たちの土壕には10人の女の子がいて、  
みな男物のパンツをはいてた。まったく、どうし  
ようもない！夏も冬も、4年間だよ。ソ連の国境  
を越えた時、ポーランドの最初の村で初めて女物  
のパンツとブラジャーがもらえたんだ。ははは、  
分かるよね、私たち初めてあたりまえの女物の下  
着をもらったんだよ…。

どうして笑わないのさ？ 泣いているのかい？  
どうして？<sup>25</sup>

これも、男性しか受け入れた経験のない軍隊組織で  
女性性が無視されるなか、女らしさを大切にしていた  
事例ということができるだろう。

しかし、これは香水やハイヒールの事例に象徴され  
る女らしさの保持だけには終わらない。戦争が女性性  
を抑圧しているのは確かであるが、女性だけではなく、  
戦争の構造が人間というもの全般を圧迫するものであ  
ることが想起される。作られたナショナリズムに囚わ  
れ、国家の思惑にのせられてしまう人びとの愚かしさ  
を突き抜けたところで、「祖国のために死んでもいい  
覚悟」でいた人びとの姿が垣間見えるのである。

ここでも、女の物語を守ることが人間の物語を守る  
ことになっている。

#### Ⅳ. 戦争とナショナリズム

本書は明らかにナショナリズムの問題を含んでい  
る。ナショナリズムは総力戦に動員をかけるためには  
不可欠のものであり、それは家父長制の女性抑圧と収  
奪の構造を本性的に宿している。

本書にはいやいや動員された証言者の話は出てこ  
ず、そのほとんどが祖国愛に突き動かされて志願した  
女性たちばかりである。後方支援であることに満足せ  
ず、強引に陸軍や空軍の戦闘員や工兵などとして前線  
に派遣されることを懇願した人が圧倒的に多い。この  
祖国愛は、独ソ戦開始後、国民を動員するためにス  
ターリンが「兄弟姉妹たちよ…！」と呼びかけたとき  
に、むくむくと頭をもたげてきた<sup>26</sup>。戦前から、命よ  
りも大事なものとして祖国に身を捧げる教育が徹底さ  
れていたし、同時に社会主義思想の理念を国民が身体  
化していたことがその素地となった。30年代後半の  
スターリンの大粛清によって、国民の三分の一が家族  
や知人に処刑や収容所送りになった人を持つという状  
況であったにもかかわらず、上記の呼びかけにより、  
今はひとまずそのことは置いておいて祖国防衛に貢献  
しよう、と民心は方向付けされたのである。アンダー  
ソンの定式を彷彿とさせる。

これまで自己の選択により出征したことが女性兵士  
を自律的な主体にしたと強調してきた。しかしそれは、  
女性兵士といえども国家の煽るナショナリズムに突き  
動かされて戦争に行ったという事実を忘れさせるもの  
ではない。戦場に赴くということは、暴力を占有する  
国家に思考を横領され、家父長制の固着に加担するこ  
とである。女性兵士も男性兵士同様、国家の手のひら  
から一歩も出てはいなかったことに留意する必要がある。

『戦争は女の顔をしていない』に登場する多くの人  
びとが、戦後三十年以上もたってからアレクシエー  
ヴィチに語り始めたにもかかわらず、この自分のナ  
ショナリズムを批判的に捉えている人はひとりもいな  
い。本書には、女性兵士たちのナショナリズムが丸ごと  
保管されたままである。

アレクシエーヴィチ自身はというと、彼女の側にナショナリズムに関する批判的な視線があったのかどうかは、このテキスト内では明らかにされていない。ただし、最新作の『セカンドハンドの時代』まで到達して、幾人かの証言者と共にアレクシエーヴィチは、自分たちが被害者であったとともに体制の存続に手を貸した加害者でもあった、すなわち共犯者であったという認識を持つに至っている。

また、彼女はつねに弱者の側、抑圧されたものの側に身を置き、著作活動を通して反権力、反体制の姿勢を貫いている。そのためロシア現政権からは疎まれ、ベラルーシでも同じ事情で出国を余儀なくされて、ヨーロッパに仮住まいしていた時期さえあった。

このようなことを考えあわせると、アレクシエーヴィチのなかでは、そもそも国家というものが欠くべからざるものとしてあるのかどうかさえ疑わしくなってくる。

たしかにアレクシエーヴィチの作品は、すべてソ連に関わるものであるから、一見ナショナリスティックであるようにも見える。しかし、実際に彼女が拘泥するのは自分の周りにいた戦争を体験した女性たちであり、赤い人々<sup>27</sup>であって、かれらに対する愛着は常にストレートに表現されている。レーニンの書物は読んだことがない、自身の基盤にあるのはロシア文学、特にドストエフスキーなのだとも言っている。このアレクシエーヴィチの姿勢は、人が属するものは郷土でもなく祖国でもないと考察するシモーヌ・ヴェーユの次の言葉を想起させる。

…各集団は独自の存在であって、もしそれが破壊されるなら、他の集団によってかえることはできない。…かかる集団はその持続を通じて、すでに未来の中に入り込んでいる。…そのおなじ持続を通じて、かかる集団は過去にその根をおろしている。したがって、死者たちによって蒐められた霊的な富を保持する唯一の機関、死者たちがそれを介して生ける者たちに語り掛けることのできる唯一の伝達機関をなしている。この地上において、

人間の永遠の運命と直接のつながりを持つことのできる唯一無二のもの、それは世代から世代へと伝達されるこの運命にかんして、十全なる意識を持つことのできた人びとの輝きである<sup>28</sup>。

アレクシエーヴィチ自身のなかでは国家からその意味が剥落しているとしても、彼女は祖国愛というものから離れていることはできない。女たちの物語をまもるということは、かつての女性兵士たちが抱きつづけている祖国愛をも包容するということだからである。それはアレクシエーヴィチが根をもつことであり、そのために本作はソ連という特殊な国家の物語ではなく、普遍的な物語になるのである。

## V. 女たちの戦後

戦後、やっと故郷に戻った女性たちを待ち受けていたのは、戦争よりも過酷な戦争ともいべき状況だった。

名前は伏せてくれとアレクシエーヴィチに頼む戦場の英雄は、戦後、三日間家にいて、四日目の朝、母親にたたき起こされた。「出て行っておくれ。まだ妹が二人いるんだ。あんたの妹じゃ、だれもお嫁にもらってくれないよ。あんたが四年間というものの戦争に行っていた、男たちの中にいたってことをみんな知っているんだよ」<sup>29</sup>と母親は言った。

狙撃兵のクラウヂヤは、40年たった今でも祖国に帰ったときのことを涙なしでは語れない。男たちは黙っていたけど、女たちからは「あんたたちが戦地で何をしていたか知っているわ。若さで誘惑して、あたしたちの亭主と懇ろになってたんだろ。戦地のあばずれ、戦争の雌犬め…」とありとあらゆる侮辱を受けた。戦後一年で結婚したが、娘は知的能力に問題を抱えて生まれてきた。そのとき自分は罰を受けていると感じた。生まれた女の子を見て、夫は「まともな女なら戦争なんか行かないさ。銃撃を覚えるだって？だからまともな赤ん坊を産めないんだ」という非難の言葉を残して出て行った。しかし、クラウヂヤはこの世で何よ

りも祖国を愛していたのだという<sup>30</sup>。

このほかにも、夫の母親には戦地の花嫁であるとして受け入れられなかった記憶や、共同アパートの共有空間で女性たちにいじめ抜かれた記憶など、同胞であるはずの女性が敵となった。男性の意識も大差ない。アレクシエーヴィチが汽車の中で出会った男たちは、「我が軍の看護婦たちが包囲された時、負傷者は子供のように無力なことから看護婦たちが銃を撃って負傷者を守ろうとした、これを聞いた時は理解できた。しかし、中立地帯で誰かを殺すために二人の女が狙撃銃をもって匍匐前進するというのはこれは…やはり狩猟と言うしかない。私自身だって撃ったが、私は男だからな…」と言ったり、「そう言う女は斥候に行く仲間ではあるが妻にはしない。女性は、母親であり花嫁だ、憧れの対象と思っていた。…戦争は男のやることだ」と感想をもらした<sup>31</sup>。

主体的に選択したことであるために、戦争に行ったこと自体を女性たちは否定したり後悔してはいない。少なくともそのような証言はない。戦争に参加するということは、乱暴な形で一種の女性の解放であったのかもしれない。しかし、それが平時には続かなかった。戦後、より一層女性抑圧の構造は強固になっていったように見える。男性ばかりか、女性自らも積極的にその構図を再生産していたのである。

女性たちの前線の記憶のなかでは、男たちの態度は見事で、いつでも女性たちをかばって大事にしてくれ、優しさや温かい心遣いがあったという。しかし、戦後は女性たちの戦争物語はひた隠しにされねばならず、男たちも勝利を分かちあおうとはしなかった。女性兵士は、自分たちの勝利が取り上げられたと感じていた<sup>32</sup>。

いかに兵員不足だったとはいえ、戦中も戦後も女性が戦場で戦うことについては罪の意識を感じていたという男性は多い。どんなに女性に力量があるとわかって、基本的に女性は守るべき弱いものであって、女性を戦場にとどめざるをえなかったのは男性の責任だと考えている人も少なくない。女性は弱いものとして擁護しなければならないという男性の寛容さに見える

ものは、逆説的にも女性抑圧の構図を固定することに加担してきた。

ソ連では、特にブレジネフの停滞期に、社会主義イデオロギーを継続させるために男女平等の実現が図られ、離婚や中絶の問題など女性が不利にならないよう、その立場が気遣われた。[塩川伸明他編『ユーラシア世界④』2012] その平等の理念に従って（あるいは生産性向上のために）、早い時期から女性も男性と同じ職業に就くことができた。重要な分野は相変わらず女性には開かれてはいなかったが、ほとんどの女性が男性と同じ条件のフルタイムの仕事を持っていた。それにもかかわらず、家事と育児は女性の仕事であるという古くからの感覚はその事実とは別個に生き続け、女性は仕事明けに家庭で寝るまで別の仕事をするようになった。

これに関しては数多くの研究が積み上げられているが、なかでも『一週間は一週間として』[バランスカヤ 1969 = 1973] というソ連時代の小説はこの事情をよく伝えるものとして読み継がれてきた。高学歴の共に専門職に就く夫婦には三人の子どもがいるが、家事育児はほとんどが妻の肩にかかっている。夫がサポートしないわけではないが極めて気まぐれである。夫婦の間には口論が絶えないが、それがかみ合うことはまずない。疲れ果てた妻を夫が慰撫するところで一週間が終わる。男性のいたわりですべてがリセットされるが問題は何も解決されておらず、同じ状況が再生産され続けることになるという話である。

家事と育児は女性の仕事という定式が、女性自身に内面化され、重労働にあえぎつつも疑問視されることがなかった。この不条理を女性に受容させ続けてきたシステムが近代家父長制である。

## VI. 戦争の機制にないもの

「秘密が牙をむく」という前出の一文は、戦後、戦争体験のある女性を社会が排除したことだけでなく、家父長制の存在自体をも指していると考えられる。家父長制は政治的には、一群の人間すなわち女性が、他

の一群の人間すなわち男性によって支配される仕組みである。また、集団としての男性が不平等なジェンダー秩序を維持することから利益をえようとする仕組みである。[コンネル 2002 = 2008]

第Ⅱ章では、女性が戦争の機制の中で、男性に劣らぬ能力を発揮しうる実証例が示されていた。第Ⅲ章では、女性が戦場でも「女らしさ」を持ち続けようとするのは、自分のアイデンティティをなす「文化」を失うまいとしたためだと考察した。そこでは女性は、ときに男性より自立した主体としてあった。しかしながら、第Ⅴ章にあるように、女性が戦争の機制を離脱し、家父長制の仕切る平時の日常に戻ると、たちまちその位置は掘り崩され、戦争に行った女性は排除される。

男性にとっては、戦争は男性性の最大の表出の場である。男性は、平時の日常を統御する家父長制のなかで、男らしくあるという価値観を常に刷り込まれ、内面化させてきた。戦争に行き帰って来れば、元の支配する者としての位置に戻ることができる。

女性兵士たちはこのダイナミズムを知らないまま戦争に参加してしまった。戦場はもともと男性のみで構成されており、軍隊の階級の構図はあるものの、家庭の中のように女性労働の収奪の空間としては存在していなかった。初めのうちは女性が闖入者として排除されかかったとしても、死という目の前の脅威の前には、平時に家父長制がもたらす圧倒的な利益など無意味になって、ただ人間としての本領が発揮される場となるのである。運命共同体である男女からなる兵士の集団の中に、家父長制的抑圧や差別の構造があからさまに持ち込まれることは、むしろ軍隊という機構を存亡の危機にさらしかねない。すなわち、戦争という一過性の場では、男女に関係なく最大限に人間を使役することだけが課題であって、男女を分け隔てすることで軍隊の規律を乱すことは得策ではない。

しかし、戦争が終わると、すべての場が再び家父長制によって閉じられる。それは世界の土台構造に固定されたものであり、社会という枠の中にはめ込まれたもうひとつの枠だからである。再び女性は劣位に置かれなければならない、活躍する能力のある女性は、家父

長制の根幹を揺らがす者として危険視され周縁化される。

従来の戦争の物語は、勝利であるにしろ、戦争の悲惨さであるにしろ、男性の、男らしさの排他的世界が描かれていた。しかし、アレクシエーヴィチの戦争の正典の語りに対抗しようとする試みでは、戦争の終結とともに、女性が男性とともに勝ち取った平和な時代が女性にだけ牙をむくという転倒を描き出したのである。

独ソ戦において女性兵士は男性に劣らぬ働きを見せ祖国に貢献したが、戦後、彼女たちは否定され、名誉を剥奪され、男性の後ろに隠れて生きることを余儀なくされたことを見てきた。その周縁化の機制は、歴史汎通的な女性抑圧の構造であり、社会の土台構造に埋め込まれた家父長制である。そのことを女性たちの語りは、無意識のうちに明らかにした。

本稿では、自らの意思で従軍した女性たちが、戦争のなかで、主体として立ち上がることが可能になったと主張してきた。それは本人たちの気づかぬ間に、家父長制の縛りを超え稀有な空間を獲得した瞬間でもあった。確かに存在したその時間が、女性たちの生と、そしてこの物語に豊饒さを与えている。

## VII. 本書に書かれていないこと

「とてつもない秘密が牙をむいている」というテキスト中の一文に拘泥するとはじめに述べた。その内容は、これまでのところでは、戦後の女性兵士の排斥とその基盤にある家父長制の不可視化された存在であると分析してきた。しかし、さらにもう一步踏み込み、文脈から推し量るに、戦場での性暴力を具体的には指し示していると考えられる。おそらく的を外れてはいないであろう。

次のようなアレクシエーヴィチの生い立ちは、女たちの語りの欠落した部分に反応した。

私が子供時代を過ごした村は女しかないなかった。女村。男たちの声は聞いたことがなかった。



……戦争の話をするのは女たち。泣いている。泣いているかのように歌っていた<sup>33</sup>。

……女たちは黙っている。私をのぞいて誰もおばあちゃんやお母さんたちにあれこれ問いただした者はいなかった。戦地に行っていたものさえ黙っている。もし語り始めても、自分が経験した戦争ではなく、他人が体験した戦争だ。男の規範に合わせて語る。家で、あるいは戦友たちの集まりの時だけに、ちょっと泣いたり、戦争を思い出す<sup>34</sup>。

読み手は、アレクシエーヴィチ自身のこの証言に、表面の言葉以上の何かがあると敏感に感じ取るであろう。「泣いてる。泣いているかのように歌っていた。」とされているが、証言者もアレクシエーヴィチも発することのなかった言葉に耳を澄まさずにはいられない。

500 以上も集めたインタビューの中には、直接性暴力について語られたものがあつたのかもしれないが、本書に収められているものは暗示的なものがほとんどである。作者は自己検閲をかけたかもしれないし、時尚早生であると判断したかもしれない。なによりも出版されなければ意味がないと考えたのかもしれない。しかし書かれていなくても察知することは十分に可能である。

近年の研究が明らかにしつつあるが、独ソ戦であれば、侵攻したドイツ兵による前線地域のソ連女性に対して、味方であるはずのパルチザンによるソ連女性に対して、軍隊内で、最終的にはドイツに進軍したソ連兵による東欧やドイツの女性に対して、性犯罪が行われた可能性を否定することは難しいであろう。本作ではその件にふれた証言はごくわずかしかない。あえて数をしぼるというアレクシエーヴィチの方法論においては、全体の中での数の少なさがむしろ読者の感覚を刺激し、証言をインパクトの強いものにする効果がある。逆説的だが、書かれていないからこそ、見出そうとする読者の感覚はより研ぎ澄まされるということである。

ある。語りが回避されている、連続しない欠落部分がある、という「不在のイメージ」[木村 2018]は反対に存在を確信させるものになる。語られていない部分を持つ証言が巧みに配置されることによって、それら是一つの事象を立体的に描き出し、像を結ばせるのである。[アダモーヴィチ 1979 = 1986]それらは他の叙述方法にはない、文学のみが持つ潜勢力であるとも言えよう。

家父長制の最大の戦略は、支配者にあらがう余地や可能性はないという心性を、支配される側の内面に埋め込むことである。これは世代を通じて巧妙に成し遂げられてきた。女性兵士たちが、呪いがかったように何十年も口を閉ざしていたのはそのためであり、今日でも呪いはまだまだ解けてはいない。いや、それどころか家父長制という構造体の骨格が盤石なままであることは、時折その一部の覆いがはがれて露わになるという日常的な体験から確信せずにはいられない。ただ女性解放や弱者救済の内側からの声が、対処療法的にであるとはいえ、その表面を削り落としつつはある。

近年ようやく家庭内の性被害が直視されるようになってきたが、裁判の判決では、抵抗した形跡がないということで加害者の無罪が言い渡された事案が、メディアによって大きく取り上げられている。弱者の思考回路には、家父長にあらがうという選択肢が一度も設定されたことはない。大祖国戦争の女性兵士の時代と同様に、初めからその視点が欠落しているのである。

家父長制の機制は通常意識されている以上に社会全般に浸透しており、その相貌を捉えることは、極めて今日的な問題である。アレクシエーヴィチの仕事はそのことにもつながっている。

## おわりに

家父長制という一方の側を利する古くからある構造の中であって、女性たちは無自覚にそのシステム内に回収され続け、システムの存続を支え続けてきた。家

父長制の起源は、農耕経済すなわち穀物の蓄積の時代に始まったとする説もある。[ラーナー 1986 = 1996] しかし近代の家父長制はその連続として捉えるわけにはゆかず、それまでのものと相貌を異にする。それは資本制経済とほぼ同時期に成立したもので、女性を核とするマイノリティの家父長制的収奪が初めから資本主義経済の基底にあった。単に男性を優位に立たせるという階級的な意味を超え、資本主義的経済体制の成立段階から、それは骨格の一部分として、それなしには成り立たないものとして既に組み込まれていた。特に女性はそのしくみの中で、労働力とセクシュアリティと人間としての矜持を収奪され、二級市民の地位に甘んじさせられてきた。[上野 2018] その構造に乗る形で生産性の向上が追求され、膨大な蓄積が可能になったのである。

『戦争は女の顔をしていない』は、家父長の目線で書かれた大きな物語に、女性兵士の英雄譚、戦争の悲惨さ、ソ連人の過酷な過去という「小さき人々」の対抗的語りを対峙させた。対抗的語りの創作を通して、家父長制という古くて新しい問題系の浮上する場が新たに開かれていった。

驚くべきことに、家父長制の構造を取り出そうとしたとき、さらにその前景には、女性、男性の別を越えた人間の物語がにじみ出してきたのである。

女たちの物語を守るということは、それらを肯定し

て慈しみ、外の重圧から守り保存するということではない。対抗的語りの場に女性たちを引きずり込み、運動の巻き起こることを促す。その中で語り始めた当事者は、自身が歴史のエージェンシー、行為主体であることに（実は無自覚にはあるが）覚醒していくのである。戦争で受けた精神と身体の傷はいえることはない。しかし、発話という解放の行為により、被抑圧者であった女性たちは確実に変貌し、彼女らの前に新たな境位さえ開かれる。それらの認識の転回とでもいべき事態は、作者と読者のせめぎあいの中でも起こっている。人間の歴史を編み上げるという本来の歴史の語りを取り戻され、周縁化されていたものたちが歴史主体として変容を遂げていく。そしてそれを目を見張りつつ眺める「読み手」という新たなアクターを出現させる、そのようにして女たちの物語、あるいは人間の物語は守られていく。

『戦争は女の顔をしていない』というタイトルには多様な意味が込められているように見え、挑発的でさえある。本作には、自分の体験も話したいと申し出る人がひきも切らず、いまだに書き加えの作業が続いているという。著者は「人間の生涯と同じ長さの本を書いているのだ」、と得心したそうである。読み手も、それと共に果てしなくタイトルの意味を反芻し続けることになるのかもしれない。

#### 注

- 1 権力者に抑圧されながらも生きぬこうとする市井の人びとを作者はこう呼んでいる。
- 2 収録された証言だけでなく、採用されなかった証言にもこのことが言える。(本書, 470)
- 3 『戦争は女の顔をしていない』, pp. 14-15.
- 4 同前, p. 5.
- 5 同前, p. 381.
- 6 第一次世界大戦でも 6,000 人の女性兵士が従軍したと言われている。
- 7 『戦争は女の顔をしていない』, p. 5.
- 8 もっとも、アレクシエーヴィチの証言文学と他とを分かち最大の特徴は地の文が切り詰められていることである。なかには他の文にあたる部分がほとんどない作品さえあるため、その介入の後हतどりにくい。
- 9 2019 年 10 月 14 日付朝日新聞朝刊記事「高校の国語 文学を軽視？」の安藤宏氏の秀逸なコメントである。
- 10 2019 年 8 月 19 日放映の NHK「100 分 de 名著 カイヨワ『戦争論』第 3 回」の中の西谷修氏のコメントである。

- 11 2016年にアレクシエーヴィチが東京外国語大学のシンポジウムに招聘された際の彼女自身の言及。
- 12 『戦争は女の顔をしていない』, pp. 122-123.
- 13 同前, pp. 217-218.
- 14 同前, p. 134.
- 15 同前, p. 9.
- 16 同前, pp. 107-108.
- 17 同前, p. 283.
- 18 同前, p. 160.
- 19 同前, p. 242.
- 20 同前, p. 352.
- 21 同前, p. 255.
- 22 同前, p. 232.
- 23 同前, p. 240.
- 24 同前, p. 297.
- 25 同前, pp. 124-125.
- 26 同前, p. 66.
- 27 ソ連で社会主義思想をはぎ取れないほど深く内面化した、ある意味非常に純粋な人々を作者はこう呼んでいる。
- 28 ヴェーユ, 1949, pp. 27-28.
- 29 『戦争は女の顔をしていない』, p. 35.
- 30 同前, pp. 367-369.
- 31 同前, pp. 133-134.
- 32 同前, p. 183.
- 33 同前, p. 3.
- 34 同前, pp. 4-5.

#### 参考文献

- 池田嘉郎, 2017, 『ロシア革命 破局の8か月』岩波書店。
- 上野千鶴子, 1998, 『ナショナリズムとジェンダー』青土社。
- , 2009, 『家父長制と資本制 マルクス主義フェミニズムの地平』岩波書店。
- 上野千鶴子, 蘭信三, 平井和子編, 2018, 『戦争と性暴力の比較史へ向けて』岩波書店。
- 加納実紀代, 1995, 『女たちの〈銃後〉』インパクト出版会。
- , 2005, 『戦後史とジェンダー』インパクト出版会。
- 木村朗子, 2013, 『震災後文学論 新しい日本文学のために』青土社。
- , 2018, 『その後の震災文学論』青土社。
- 塩川伸明, 小松久男, 沼野充義, 松井康弘編, 2012, 『ユーラシア世界④公共圏と親密圏』東京大学出版会。
- 横手慎二, 2014, 『スターリン「非道の独裁者」の実像』中央公論新社。
- ベンヤミン, ヴァルター, 1940年成立, (= 1995, 浅井健二郎編訳)「歴史の概念について」『ベンヤミン・コレクションⅠ 近代の意味』ちくま学芸文庫。
- , 1996 (= 2007, 浅井健二郎編訳)「翻訳者の使命」『ベンヤミン・コレクションⅡ エッセイの思想』ちくま学芸文庫。
- Адамович, Алесь / Гранин, Даниил, 1979, БЛОКАДНАЯ КНИГА, М.: Советский писатель. (= 1986, 宮下とも子 他訳『封鎖・飢餓・人間 1941→1944年のレニングラード 上・下』新時代社。)
- Алексиевич, Светлана Александровна, 1984, У ВОЙНЫ НЕ ЖЕНСКОЕ ЛИЦО, Москва: Время. (= 2016, 三浦みどり訳『戦争は女の顔をしていない』, 岩波書店。)
- , 1985, ПОСЛЕДНИЕ СВИДЕТЕЛИ, Москва: Время. (= 2000, 三浦みどり訳『ボタン穴から見た戦争』, 群像社。)

- , 1991, ЦИНКОВЫЕ МАЛЬЧИКИ, Москва: Время. (= 1995, 三浦みどり訳『アフガン帰還兵の証言』, 日本経済新聞社.)
- , 1997, ЧЕРНОБЫЛЬСКАЯ МОЛИТВА, Москва: Время. (= 1998, 松本妙子訳『チェルノブイリの祈り』, 岩波書店.)
- , 1994, ЗАЧАРОВАННЫЕ СМЕРТЬЮ, Москва: Слово. (= 2005, 松本妙子訳『死に魅入られた人びと』群像社.)
- , 2013, ВРЕМЯ СЕКОНД ХЭНД, Москва: Время. (= 2016, 松本妙子訳『セカンドハンドの時代』岩波書店.)
- , 2015, О проигранной битве, <https://www.nobelprize.org/prizes/literature/2015/alexievich/25414-nobel-lecture-by-svetlana-aleksievich-in-russian/> (= 沼野恭子訳「負け戦」『世界 2015 年 3 月号』岩波書店.)
- Баранская, Наталья, 1969, НЕДЕЛЯ КАК НЕДЕЛЯ, Новый Мир No. 11. (= 1973, 高橋昌美訳, 『一週間は一週間として』白馬書房.)
- Орлов, А., 1908, Домострой по Коншинскому списку и подобным М.. (=1984, 佐藤靖彦訳, 『ロシアの家庭訓 (ドモストロイ)』新読書社.)
- Buck-Morss, Susan, *Dreamworld and Catastrophe: The Passing of Mass Utopia in East and West*, The MIT Press. (=2008, 堀江則夫訳『夢の世界とカストロフイー東西における大衆ユートピアの消滅』岩波書店.)
- Boym, Svetlana, 2001, *The Future of Nostalgia*, Basic Books.
- Connell, Raewyn, 2002, *GENDER*, Polity press Ltd., Cambridge. (= 2008, 多賀太監訳, 『ジェンダー学の最前線』世界思想社.)
- Figes, Orlando, 2007, *The whisperers: Private Life in Stalin's Russia*, Henry Holt and Company.  
 (= 2011, 染谷徹訳, 『囁きと密告 スターリン時代の家族の歴史 上・下』白水社.)
- Lerner, Gerda, 1986, *The Creation of Patriarchy*, Oxford University Press. (= 1996, 奥田暁子訳, 『男性支配の起源と歴史』三一書房.)
- Youri Obraztsov and Maud Anders, 2014, *SOVIET WOMEN SNIPERS OF THE SECOND WORLD WAR*, Historire & Collections. (= 2015, 龍和子訳, 『フォト・ドキュメント 女性狙撃手 ソ連最強のスナイパーたち』原書房.)
- Yurchak, Alexei, 2005, *EVERYTHING WAS FOREVER, UNTIL IT WAS NOMORE The Last Soviet Generation*, Princeton University Press. (= 2017, 半谷史郎訳, 『最後のソ連世代 ブレジネフからベレストロイカまで』みすず書房.)
- Weil, Simone, 1949, *L'enracinement*; Collection ESPOIR, Gallimard. (= 2009, 山崎庸一郎訳, 『根をもつこと』春秋社.)
- 安西隆子, 2016, 「スベトラナ・アレクシエーヴチ『戦争は女の顔をしていない』論」『国際関係研究』(日本大学) 第 37 巻 1 号, 35 ~ 43.
- Гапова, Елена, Страдание и поиск смысла: "моральные революции" Светланы Алексиевич, Неприкосновенный запас, No. 1, 2015, С.209-223, Москва.
- Крылов, В.Н., ДОКУМЕНТ ДОЛЖЕН ЖИТЬ ПО ЗАКОНАМ ИСКУССТВА  
 (ИСТОРИЯ «ДОМАШНЕГО» СОЦИАЛИЗМА В КНИГЕ СВЕТЛАНЫ АЛЕКСИЕВИЧ «ВРЕМЯ СЕКОНД ХЭНД»)  
 , Филология и культура, 2014, No. 3(37).
- Уцакин, Сергей, ОСКОЛКИ ВОЕННОЙ ПАМЯТИ: "ВСЕ, ЧТО ОСТАЛОСЬ ОТ ТАКОГО УЖАСА?" Новое литературное обозрение, Москва. No. 5, 2008, С.234-241.
- Шабеева, Татьяна, Писать расчётливо навзрыд, Литературная газета, No. 39, 02 октября 2013, С.7, Москва.
- Bush, Daniel, 2017, "No other proof": Svetlana Aleksievich in the tradition of Soviet war writing, CANADIAN SLAVONIC PAPERS VOL. 59, NOS. 3-4, 214-233.